

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2008年12月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.22 「誰の都合？」

以前、下の娘が17歳の誕生日を迎え、家族5人で食事に行った時のことです。娘が「トロの刺身が食べたい」と贅沢を言うものですから、奮発して会席料理を食べに行きました。

6人部屋の個室に5人が座り、次のものを注文いたしました。「会席膳 5人前」「トロのお造り」「炭焼き海鮮」「マグロのカルパッチョ」「和牛の方葉焼き」「特製サラダ」「飲み物それぞれ」

そこは元来、「しゃぶしゃぶ」の専門店だったので、テーブルの上に「卓上コンロ」が二つ置いてあったのですが、一品料理をいくつ頼んだので邪魔になると思い片付けてもらいました。

ところが先付けを持ってきた配膳係のベテラン?女性従業員が、「鍋がありますので・・・」と言って、コンロを元に戻します。「あれっ?」と思ってメニューを確認すると、会席膳のところに「ひとり鍋」・・・。実は、この時点で店側の意図を理解したのですが、そこはマーケットとしての血が騒ぎます。わざと知らぬ振りして、最初の料理を持ってきた配膳係の人にお願ひしました。

「一品料理を皆で取り分けるのにコンロが邪魔だから片付けてくれる?」

素直な(多分バイトの)お姉さんは、ご丁寧に配線ごと外して、納戸の中に2つの卓上コンロを仕舞ってくれました。さあ、店はどう出るか?店の意図は明らかです。5人分の「一人鍋」を大鍋で一緒に料理することで、手間と経費を削減しようとしているのです。

次々と各自の会席膳と一品料理が運ばれてきて、テーブルの上は料理で一杯になっています。そこに、コンロを片付けた「お姉さん」が再びやってきて、申し訳なさそうに言います。

「『しゃぶしゃぶ』を大鍋で料理しますので、ご用意させていただきます。」
どうやら、調理場で叱られたらしく、ちょっと落ち込んでいます。
「お姉さん、私は会席膳を頼んだのであって、メニューには『ひとり鍋』とありましたよ。おかしいですね・・・責任者を呼んで

きてください。」

可哀想なお姉さんは、より落ち込んだ様子で部屋を出て行きました。程なくして、調理場の責任者(板長?)らしい男性がやってきて言います。

「数が5人前と多い場合、大鍋で調理させていただいています。」
それが店の決まりかのように。

「テーブルの上を見て下さい。一品料理が並んでいるでしょ?家族みんなで取り分けるのにコンロが置いてあったのでは邪魔なのは分かりますよね?それに、私は何も無理をお願いしているではありません。ちゃんと、お品書きには『ひとり鍋』と書いてありましたよ。メニュー通りに持って来て下さいと言っているだけですよ。」

私が穏やかに、二人の娘が「おののく」程度の口調で説明しているとき、場違いな蝶ネクタイをした男性が飛び込んで来ました。どうやら、事情を聞いた店長がやってきたようです。

「誠に申し訳ありません。当方の手違いで・・・。」と平謝りに謝ります。

「手違い?そうではないですよ。どうやらこの店は『客の都合』よりも、『店の都合』を優先しているようですね。そんなことでは、せっかく美味しい料理を出していても台無しですよ。」

さて、塾の現場でも同じことが結構起こっています。例えば、テスト前補講が担当者の都合で変更されます。ある時は土日、あるときは土曜日だけ・・・その理由が「日曜日のゴルフ」だったり・・・ゴルフがバレなくても、そうした姿勢は絶対に「客」に伝わります。くれぐれもご注意を・・・。

冬期講習を頑張りつつ・・・良いお年をお迎え下さい。

今月の気になるハナシ

もうひとつの国際的学力調査

もうひとつの国際的な学力調査・・・それは、国際教育到達評価学会（IEA）が小中学生を対象に実施する国際比較教育調査で、「Trends in International Mathematics and Science Study」です。日本では「国際数学・理科教育動向調査」、略して『TIMSS』と呼ばれています。この『TIMSS』は、昨年度に小4・中2を対象に実施され、この度、調査結果の概要が発表されました。

1. PISAとの違いは？

PISAは、義務教育終了段階で身につけた知識や技能が、普段の生活のさまざまな場面で直面する課題に、どの程度活用できるかを評価するものです。具体的には、読解的リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーを主体として調査しています。

一方、『TIMSS』は、小中学生を対象に、算数・数学と理科の問題とアンケートの実施により、どのように教育しているかと、それによってどのように習得したかを調査します。その調査結果を元にした有効な学習指導方法の反映を、目的としています。

つまり、PISAは学校や社会で得た知識・技能の活用力を調査し、『TIMSS』は、学校で習う内容を、どの程度習得しているかを調査するテストになっています。

2. ゆとり世代の学力は・・・

「ゆとり教育」が全面实施されたのは、2002年からですが、移行措置は、2000年から段階的に実施されていました。この移行期間を含めると、今年の中学3年生は、「小1から中3までゆとり教育で育った世代」となります。そして、この世代の最新の学力調査の結果が、昨年実施された『TIMSS』になるわけです。

3. 理数学力下げ止まり？

テスト結果を見ると、実施された科目の平均点は、すべて前回（03年実施）以上（中2数学は同点）の成績を挙げています。これを受けて、文科省は、「小中学生の理数の学力低下に歯止めがかかった」と見えています。

しかし、専門家の間では、解釈が非常に難しいと言われています。実際、「下がったとはいえないが、上がったともいえない」というのが、一般的な

見解になっているようです。

また、同時に行われたアンケートに目を移すと、小4で「勉強が楽しい」と答えた生徒の割合が増えるなど、学習意欲に、改善傾向が見られるような結果が発表されています。「勉強好きが増えてよかった」という意見がありそうですが、実は「ほとんど変わっていない」のが現状という見方もあります。

4. ゆとりに成果無し？

「勉強が楽しい」という質問に対し、「強くそう思う」と答えた割合は、少しずつですが、たしかに増加しています。しかし、「そう思わない」「全くそう思わない」という割合は、中2数学では、61%と依然として高く、中2理科でも減ってはきていないものの、40～50%は楽しく思っていないことがわかります。

これに対し、ある専門家は、「理科も数学も“そこそこ楽しい”と思っていた生徒が、『とても楽しい』と思うようになっただけで、“楽しくない”と思っていた生徒が、『楽しい』と思えるようになったわけではない」と述べています。

5. 「勉強は役に立つ」への意識

一方で、「将来、自分の望む職業につくためにいい成績を取る必要がある」と思う割合が、前回の調査に比べ増えました。「良い成績をとるため」が「テストのために勉強すること」であるとすれば、好ましいとは言えません。しかし、それが「自分の将来の職業のため」と思っているのなら、悪いことにはならないでしょう。

とは言っても、この増加にも、疑問は残ります。調査は昨年行われたものですから、今年起こったサブプライム問題、リーマンショックなどの不景気の影響は受けていません。ですから、純粋に「勉強が将来役立つ」と考えていたかもしれません。しかし、大学全入時代突入と呼ばれる今、本当に、そんなに単純に考えてよいのでしょうか。かつては、『勉強して良い大学に行くこと』が是、とされていた時期がありました。少子化などにより、この現状が変ってきている今、『勉強して良い会社に行くこと』が是と思っている子どもが、増えてきているとも考えられます。

とはいえ、勉強は「日常生活に役立つ」、「将来の自分にプラスになる」と思うようになることは、決して無駄なこととはいえません。これらの意識を、どのように持たせていくかが、教育現場のポイントとなるかもしれません。